ヒマラヤ学誌　*No.17, 162-173, 2016*

ブータンにおける初期近代教育事情の解明
―近代教育 50 年史―

平山雄大

早稲田大学教育総合研究所

はじめに

本稿は、統一された見解を見出すことが難しいブータンにおける初期の近代教育（modern education）[1] 事情に関して、信頼できる情報群から現時点で筆者が到達できうる限りの事実に迫ることを目的とする。

組織的かつ体系的な教育機関としてはチベット仏教の僧侶を養成するための僧院教育（monastic education）しか存在しなかったブータンにおいて、少数精鋭のエリート教育が開始されたのは王国成立後間もない 1914 年前後のことである。同国の学校で使用されている第 12 学年の歴史（ブータン史）教科書に目を通すと、1914 年に 46 人の少年がインドのカリンポンに位置するドクター・グラハムズ・ホーム（Dr. Graham's Homes）[2] に留学したことが、近代教育によるブータン人の人材育成の始まりとされている [3]。同年には初代国王 Ugyen Wangchuck（在位 1907 ～ 1926 年）の右腕であった Ugyen Dorji によってブータン初の学校がハに設立され、その翌年には後継者―後の第 2 代国王 Jigme Wangchuck（在位 1926 ～ 1952 年）―らの教育のために、ブムタンの王宮内に学校が設置された [4]。

その後長らく新たな学校は設立されなかったが、Mackey によると、第 2 代国王によって国内に 7 ～ 10 校の小学校が建設され、それらの学校の教授言語はヒンディー語であった [5]。1959 年には全国に 59 校の学校が存在し 1,500 人が学んでいたという [6]。そして、1961 年にインドの全面的な支援のもとで第 1 次 5 ヵ年計画（1961 ～ 1966 年）が開始されて以降は、本格的に近代教育の拡充を目指しはじめた。2015 年現在は、第 11 次 5 ヵ年計画（2013 ～ 2018 年）のもとで開発が続けられており、最新の教育統計によると全国に 539 ある学校に 17 万 1,402 人が就学している [7]。

ブータンの近代教育の歴史を系統立てて論じた先行研究としては、Tandin Wangmo & Kinga Choden による論文 [8] が代表的なものとして挙げられ、Jagar Dorji、Singye Namgyel、杉本等の研究においてもその概要が論じられている [9]。また、各種歴史研究の中に近代教育に関する記述が散見されるが、冒頭で触れた通り、特に第 1 次 5 ヵ年計画が開始される以前の教育史に関しては、統一された見解があるとは決して言えない。例えば、上記の通り第 12 学年の歴史教科書では「46 人」の少年はカリンポンに留学した人数とされているが、「46 人」はハの学校に入学した人数であると説明するもの [10]、カリンポン及びハにおける Ugyen Dorji の学校で「46 人」の男子が教育を受けたとするもの [11]、ブータンからの留学生は「34 人」だとするもの [12] 等が混在している。ハの学校の設立年に関しても、1914 年以外に 1912 ～ 1913 年 [13]、1913 年 [14]、1915 年 [15] 等の説があり、さらにブータンへの近代教育の導入は 1927 年であり、同年に 30 人の少年がカリンポンに留学したとするものもある [16]。第 1 次 5 ヵ年計画開始時の学校数及び就学者数も、11 校 400 人 [17]、11 校 440 人 [18]、59 校 2,500 人 [19]、60 校 3,000 人 [20]、72 校 2,500 人 [21] 等と文献や資料によってかなり異なるものが提示されている [22]。

本稿では、ブータンにおける初期近代教育を【黎明期】（1910 ～ 1940 年代）及び【草創期】（1940 ～ 1950 年代）に大別する。【黎明期】に関しては、カリンポン及びハにおける調査、及び当時ブータンの隣国シッキムの首都ガントクに駐在していたイギリス人の政務官（political officer、以下シッキム政務官）が書き記したブータンに関する年次報告書 [23] 等の近代教育に関連する記述の分析を通して、可能な限り不明点を明らかにする。【草創期】に関しては、拙稿 [24] において南部地域に小規模

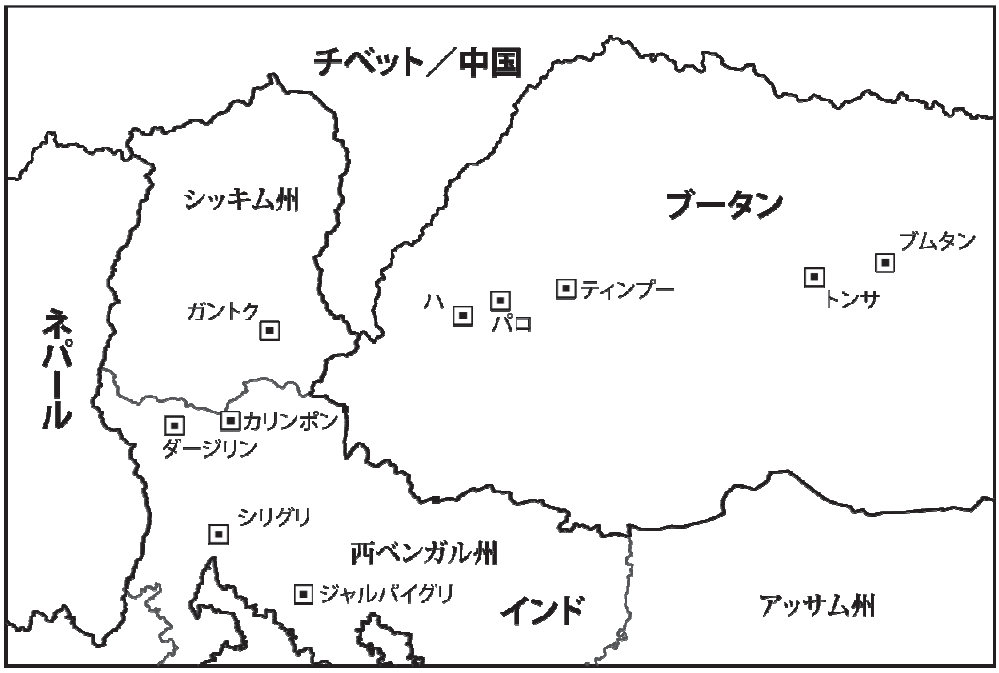

図１　ブータン周辺図（作成：高橋洋氏）。

の私立学校として設立されたネパール人移住者の学校と、全土で展開された比較的大規模の公立学校（ブータン人の学校）の存在を指摘しその対照的な特徴を論じたが、本稿ではその事実をもとに、特に 1950 年代に第 3 代国王 Jigme Dorji Wangchuck（在位 1952 ～ 1972 年）や初代首相 Jigme Palden Dorji（在任 1952（1958）～ 1964 年）[25] が近代教育に対してどのような期待を持ち、どのように整備を進めたのかを論じる。

1. 黎明期（1910～1940年代）

シッキム政務官 Bell（在任 1908 ～ 1918 年、1919 年～ 1921 年）が 1915 年に記した年次報告書内に、ブータンの近代学校に関しての記載が見られる [26]。そこで彼は、46 人のブータン人少年がカリンポンのスコットランド国教会使節に任命された教師によって教育を受けていること、少年たちは Ugyen Dorji とともに冬はカリンポン、夏はハに滞在していることを報告している。さらに、その翌年 1916 年の年次報告書には、ハの学校と並びブムタンの学校に関しても記されている [27]。

国王の居住地である（ブータンの）ブムタンに、ブータン人少年に対して彼らの母語であるチベット語（筆者注：これは古典チベット語のチョケを指していると思われる）及び英語を教える学校が開校している。この学校は最近開校したもので、現在学んでいるのはたった 18 人のみである。しかしながら、ブータン人少年に英語教育を施すことを自らの使命としている Raja Ugyen Dorji の助力により、徐々にブータンで重要な教育機関となるであろう。別の学校が西ブータンのハに 2 ～ 3 年前から存在しており、そこには 46 人の少年が在籍している。寒い季節になると、彼らは Raja Ugyen とともにカリンポンに降りてくる。Raja Ugyen は、カリンポンのスコットランド国教会使節の Dr. Sutherland からその学校の教師を獲得している。

また、1921 年に初代国王が当時のインド総督 Isaacs に送った書状にも、以下の通り最初期の近代教育に関する記述がある [28]。

1914年に、私は45人の少年を勉学のためにカリンポンへ送り（夏のセッションはブータンのハで）、1915年にヒンディー語と英語が教えらえる学校をブムタンに開校した。

まず押さえておかなければいけないのは、カリンポンへ留学した少年が冬はカリンポン、夏はハと季節移動を繰り返していたらしいことである。1958年にUgyen Dorjiの孫である初代首相に従ってブータンへと入国した中尾は、カリンポンのブータン・ハウス（Bhutan House）に拠点を持つ初代首相に関して「毎年夏になるとお国入りする」[29]と記述しているが、この移動形態はドルジ家の慣習であり先代のSonam Tobgye Dorjiもそれを常としていた[30]。少なくとも最初期は、ハの学校は年間を通して開校していたわけではなく、カリンポンへ留学した少年らがUgyen Dorjiに付き従って帰国している夏の間のみ開校していた。したがって、カリンポンへ留学した少年たちとハの学校で学んでいた少年たち（以下、ハの学校の第1期生）は同一人物を指している。

ハの学校の設立や彼らが留学をした正確な年月を特定させることは困難を極め、留学をしたのが先かハの学校が開校したのが先かという問いに対しても、現時点では明確な回答を提示することができない。ただ、彼らのカリンポンでの留学先に関しては、歴史教科書等に記されているドクター・グラハムズ・ホームではなく、同じくスコットランド国教会の神父であり、Grahamが師事していたSutherlandらによって1886年に同地に設立されたSUMI（Scottish Universities' Mission Institution）であろうと筆者は考えている[31]。

1947年まではセント・アンドリューズ・コロニアル・ホーム（St. Andrew's Colonial Homes）という名称であったドクター・グラハムズ・ホームには、当時の在学者名簿や同校が刊行した雑誌が現存しているが、1910年代にブータン人留学生が学んだという事実をそれらから確認することはできない。同校の記録で確認される一番古いブータン人留学生は、第1次5ヵ年計画が開始された1961年にインド政府の資金援助を受けて入学した「10人のブータン人男子と1人のブータン人女子」[32]である。一方で、1913年から1915年にかけてUgyen DorjiがSUMIの現地スタッフを務めていたという事実[33]、1910年代に撮影されたと推定されるハの学校の第1期生の写真（写真1）の右端に当時のSUMIで要職に就いており、現校長の曽祖父でもあるH. D. Pradhanが写っていること[34]、そして1924年にSUMIで撮られたハの学校の第1期生らの写真（写真3）が現存していること等を勘案するに、彼らが通っていたのはSUMIであったと想像される。

ブムタンの学校の第1期生の写真は、1922年にMaedeによって撮影されたものが残っている（写真2）。「ブムタンの」学校という言葉が定着している同校であるが、こちらの学校も実際は、冬の時期はトンサ、夏の時期はブムタンと季節移動を繰り返していた王家に付き従って場所を変える移動式の学校であった[35]。同校の設立年月に関しても、現時点で筆者が所有する情報から年号を特定させることはかなわない。

各学校の在学者数は、特に1920年代にはシッキム政務官によって頻繁に記録され、カリンポンへ留学した少年らの大学入学資格試験（matriculation examination）[36]の結果やその後の進学先等に関しても詳細な報告がなされている。紙面の都合上詳細は別稿に譲るが、ハの学校は1922～1923年に一時的に閉鎖され[37]、以降はカリンポンに拠点が移された。1925～1926年にSonam Tobgye Dorjiが「小さな少年の教育のために再びハに学校を開校」[38]し、17人の新たな少年がそこに入学したが、彼らがハの学校の第2期生である。ブムタンの学校も第2代国王が即位した1926年には一時期閉鎖されたようであるが[39]、翌年には第2代国王の弟であるKesang Tenzingを含めた合計20人の少年が在籍していると報告されており[40]、彼らのことをブムタンの学校の第2期生と呼ぶことができよう。

当時の学校における教育方法・内容を詳しく知ることもまた難しいが、1933年にハの学校を訪れたMorrisはその一端を紹介し、徒弟制とも表現しうる同校の教育・訓練形態を絶賛している[41]。

学校の寄宿舎に生活している約30人の少年がおり、彼らはここで大学入学資格スタンダードまでの教育を受けている。そしてやがては、医学、林学、農学といった国が必要としている

さまざまな職業の訓練を受けることが期待されている。先見の明によって、生徒の数は、現在国家が収容しうる人員の数に厳しく制限されており、初期教育の間、少年たちは最終的に配属されるであろう役職に関係する人々に常に親しく接する。特にこの点では、この学校は英領インドのどの学校よりも優れた教育を施している。

Morris は同時に、「この国に特有のニーズに見合った教育が自国語によって行わなければならない」[42] という Sonam Tobgye Dorji の信念を紹介しているが、現在に至るまでほとんどの科目において「自国語」（≒国語）であるゾンカを教授言語としていない同国にとっては非常に示唆的なものとなっている。Morris が訪れた直後の 1933 年 6 月にハを訪問したシッキム政務官 Williamson（在任 1932 ～ 1935 年）は、同校に関して「インドで訓練を受けた若者のひとりによって運営されている」、「ヒンディー語と英語が教えられている」[43] と報告しているが、この「若者」はハの学校の第 1 期生もしくは第 2 期生のひとりと考えられる。当時の生徒の写真は、Williamson が持参したカメラによってハ・ゾンの入口付近で撮影されたものが現存しており（写真 4）、同氏の 16 ミリフィルムカメラで撮られた映像には、ボクシングや漁に興じる体操着姿の生徒たちを確認することができる。

1930 年代以降は、シッキム政務官の年次報告書の中で近代教育に関する記述は乏しくなり、そこから状況を知ることは難しい。1937 年から 1947 年まで SUMI で学んだ Tashi Tobgyel は、同校に入学したブータン人生徒として自身は第 3 期生にあたると述べているが [44]、この時期のハの学校の生徒と SUMI への留学生の関係性もまた不明な点が多い。1940 年代に入るとハの学校の存在は確認することができず、年次報告書では「ブムタンの学校は良く発展したと言われている」等、ブムタンの学校のみに関しての単調な報告が繰り返されている。これらの点に関しては追加の調査が不可欠であり、今後の研究課題として残されている。

2. 草創期（1940～1950年代）

前節で記したハの学校及びブムタンの学校で行われていた少数精鋭のエリート教育とは一線を画す、新たな動きが表出したのは南部地域においてである。19 世紀末～ 20 世紀初頭より南部地域にはインド側からネパール人が入植していたが、彼らは同地域を監督する任を受けていたドルジ家に税金を納めることにより、他から干渉を受けることなく平和裡に生活を営んでいた。記録では、そうしたネパール人移住者が 1940 年代後半以降自発的に小規模な私立学校を作り、ヒンディー語やネパール語を教授言語に採用し、インドやネパールからも教員を招聘し教育を行っていた。

現在のサムツェ県に位置するチャガレイでは、1947 年に Nar Bahadur Pradhan が自宅の一室を開放して学校を開き、インドから C. M. Rai が教員として赴任している。同校は 1952 年には 3 教室、生徒約 140 人という規模に拡大し第 4 学年までの教育を施していた。そして 1956 年には現在の地―現在はサンガチョリン前期中学校（Sang-Ngag Chhoeling Lower Secondary School）として機能している―に移転するとともにインド側からも多くの者が越境通学してくるようになり、生徒数は 300 ～ 400 人に達していたと報告されている [45]。ナイニタルでは、1951 年に住民によって生徒 12 人という規模の学校が作られ、元裁判官の B. K. Thapa が彼らの要請を受けて教員として赴任した。同校は 1964 年に公立学校となり、現在はウゲンツェ小学校（Ugyentse Primary School）となっている [46]。また、チェンマリでは 1958 年に D. D. Lama によって生徒 25 人という規模の学校が作られたが、その後同氏の要請にしたがって政府が公立学校へと組み込み、1964 年に生徒 300 人規模の学校―現ノルブガン前期中学校（Norbugang Lower Secondary School）―として生まれ変わった。他にも、例えば現在のサムドゥプ・ジョンカル県では、J. B. Pradhan（写真 5）によって 1957 年にネオリ小学校（Neoli Primary School）―現在のペマタン前期中学校（Pemathang Lower Secondary School）―が設立されている。同校の教員は長年インド人が務めており、初めてブータン人教員が赴任したのは 1984 年のことであった [47]。

一方で、1950 年代に入ると一般のブータン人に開かれた学校も全国各地に作られはじめる。こ

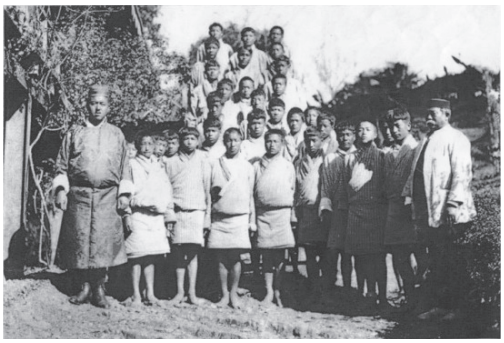

写真１　ハの学校の第１期生（撮影年不詳）出所）Kuensel (2014/01/25) “A Footnote to the First Chapter in the History of Modern Education in Bhutan”.

写真２　ブムタンの学校の第１期生（1922 年撮影）出所）Royal Geographical Society Picture Library.

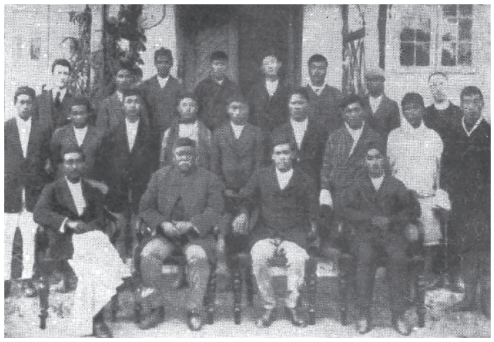

写真３　ハの学校の第１期生ら（1924 年撮影）出所）Scottish Universities’ Mission Institution (SUMI) (1986) *Sumite Century Sourvenir: The Editorial Board 1986, Kalimpong: SUMI.*

写真４　ハの学校の生徒（1933 年撮影）出所）Royal Geographical Society Picture Library.

写真５　J. B. Pradhan
出所）Om Pradhan / Tashi P. Wangdi (ed.) (2012) *Bhutan: The Roar of the Thunder Dragon*, Thimphu: K Media, p.209.

写真６　新生ハの学校の第１期生（1954 年）
出所）Stewart, Natalie H. & Todd, Susie & Stewart, Frances Todd / The National Steering Committee for the Coronation, Ministry of Home and Culture (eds.) (2008) *Class of ’56*, Thimphu: Voluntary Artists’ Studio, Thimphu (VAST).

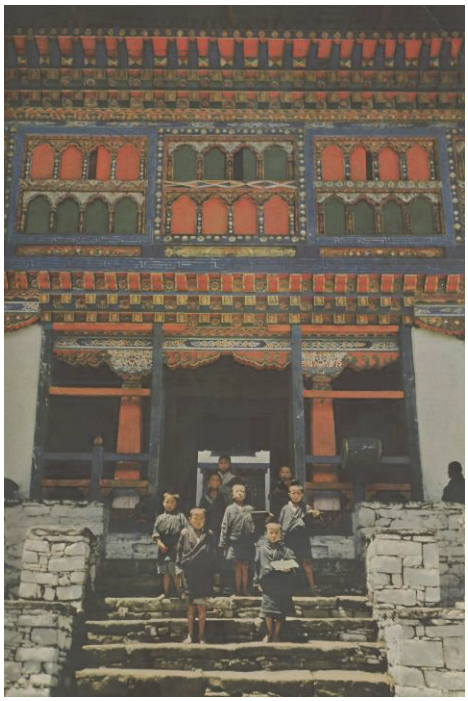

写真 7 ～ 8　新生ハの学校の生徒（1951 年撮影）
出所）Todd, Burt Kerr (1952) “Bhutan, Land of the Thunder Dragon”, *The National Geographic Magazine*, Vol.102 No.6, p.727, 752.

写真 9 ～ 12　1958 年に中尾が出会った生徒／訪れた学校（チャプチャ、パロ、ハ、ワンデュ・ポダン）
出所）大阪府立大学学術情報センター中尾佐助スライドデータベース

ちらは国王＝政府主導で、Tashi や Karchung といったハの学校の第 1 期生や初代首相らが先頭に立ち、基本的にはヒンディー語を教授言語とし[48]、ブータン人の教員が教授にあたる公立学校として設置された。

例えば、1952 年には Karchung らによって生徒数 32 人（うち 2 人は女子）の学校が、東部（現在のタシガン県）に位置するロントン・ナクツァン（Rongthong Naktshang）にて開校した。同校は設立から 7 年間は教授言語としてヒンディー語が採用されており、Karpa や Karma といったブータン人が教鞭を取った[49]。1958 年には、第 3 代国王の命を受けた Tashi が現在のペマガツェル県ユルンにて学校建設にとりかかり、翌年、初代校長 Tshewang Norbu のもとで 138 人の生徒を受け入れて開校した。同校の教授言語は 1964 年に英語に切り替えられるまでヒンディー語とチョケであったという[50]。1951 年、初代首相によってハの学校は装いを新たに一般に開かれた男女共学の学校として再開された。写真 7 ～ 8 は 1951 年に Todd によって撮影された同校の生徒（第 1 期生か？）であり、写真 8 の左後方には校舎も確認できる[51]。この新生ハの学校―現ゴンジム･ウゲン･ドルジ高等中学校―の初代校長は Dago が務め、1956 年に卒業した第 1 期生（写真 6）は、国内初となる（一般に開かれた近代学校の）初等教育修了生であるとされている[52]。同校は 1950 年代より英語が教授言語として採用されていた[53]。1958 年にブータンにて植物調査を実施した中尾はこれらの一般に開かれた近代学校のいくつかに訪れており、当時の生徒や校舎を撮影した写真を残している（写真 9 ～ 12）。

1952 年に即位した第 3 代国王は、近代国家の基盤を整えるための基礎として、一般に向けた近代教育の普及を重視していた。当初、国王は近代教育の拡充に他の社会経済開発よりも高い優先順位を与えており、「まず自国の若者を教育し、それから近代化を」というのが国家運営の大原則であったという[54]。1953 年にブータンでは一院制の国民議会が開設されたが、構成規則の前文に第 3 代国王の教育に対する考えが示されている[55]。

しかし、独立という珠玉を保持しつつも、われわれは、教育の欠如故に、未だ後進的である。われわれは、多くを改良することができないでいる。

世界の他の諸国は、教育における急速な発展の故に、迅速な進歩を遂げている。現在の状況の下で、われわれも、これら発展を遂げた諸国と同じ点にまで、自らを引き上げなければならない。

国家の運営方法と近代教育の普及の相関に関しては、初代首相が 1956 年 5 月にカトマンズにおいてニューヨークタイムズ（The New York Times）の記者に語った意見も示唆に富んでいる[56]。

ブータン人は、国家建設の欲望と外国人の援助が支配をもたらすという恐れの間で苦しんでいる。Mr. Jigme は、「ブータン人はまったくもって無学な人間なので、外国人の召使い以外には何者にもなれない」と言う。「ブータンで教育制度を確立させ、それから外国人を招聘するというのがその解決策である」と彼は主張し、ブータンが外国人を受け入れられるようになるまで 7 年はかかるであろうと見積もっている。それだけの時間を取って、ブータンは賭けにでなければならないのである。

両者に共通するのは、国の独立維持に対する危機感と、近代教育の普及をもってして近代国家の礎を築き、社会経済開発を成し遂げようという姿勢である。確かに外国人への過度の依存は国の主体性を脅かす恐れがあったため、近代化を先延ばしにするという代償のもとで、少なくとも 1959 年までは外国人への過度の依存は避けられていたようである[57]。確認されうる限り、教育現場においてもブータン人の学校では 1961 年に第 1 次 5 ヵ年計画が開始されるまで、インドをはじめとした諸外国から教員を招聘するようなことはしていない。このような中で近代学校教育の拡充が計られ、各地で公立学校が作られていく。統一された制度やカリキュラムはなかったものの、ネパール人移住者による自発的な私立学校が多く作られていた南部地域においても公立学校が開校し、私立学校を公立学校へと組み込む動きも見られるようになっていく。

ただし、当時一般的なブータン人は近代教育の

重要性をほとんど理解せず、推進する側と受容する側には大きな意識の乖離があった。就学することを地方行政官に説き伏せられた、強制的に学校に通わされた、といったエピソードは数多く残っており、初代首相は自身が整備した新生ハの学校の生徒集めに苦心し、ハにとどまらず地方においても積極的に生徒を募っていた[58]。

その後1958年9月のインド初代首相Nehruの来訪を機に、協議の末「まず自国の若者を教育し、それから近代化を」という国家運営の原則は大きく転換され、インドの全面的な支援のもとで国家開発が実行に移されることになる。そして1959年10月に開催された第13回国民議会において、「教育はあらゆる国の発展に不可欠であるため、我が王国の学校に近代教育を取り入れることが決められた。そのようにして、社会経済的自立を促進し、外国人労働力への依存を軽減する」[59]と、国としての近代教育の導入が正式に決議され、以降第1次5ヵ年計画によってその本格的な拡充が目指されはじめる。

冒頭に記した第1次5ヵ年計画開始時の学校数に関しては、「11校」と記されたものは公立学校のみを示したもの、「59校」もしくはそれ以上としたものは、公立学校に加えネパール人移住者によって南部地域に自主的に作られた私立学校も勘定したものだと単純に推察することもできるが、「59校」のうち29校は公立、30校は私立であったという第2次5ヵ年計画等の記述も存在する[60]。

政府の公式文書を精査すると、少なくとも1990年代初めまではこの「59校」(1,500人)が使われているが[61]、2000年代半ばになると突発的に「11校」(400人)が政府の公式見解に採用されている[62]。深入りすることは避けるが、この間にネパール人移住者の学校が「ブータンに存在した初期学校」から排除され、純粋に公立学校のみを数えることにした可能性がある。この「11校」は、1951年設立(再開)の現ゴンジム・ウゲン・ドルジ高等中学校、1952年設立の現タシガン中期中学校(Trashigang Middle Secondary School)、1954年設立の現ダンフ高等中学校(Damphu Higher Secondary School)、1955年設立の現ワンデュ前期中学校(Wangdue Lower Secondary School)、1957年設立の現サムツェ高等中学校(Samtse Higher Secondary School)、1958年設立の現シェムガン高等中学校(Zhemgang Higher Secondary School)/シェムガン前期中学校(Zhemgang Lower Secondary School)、1958年設立(1959年開校)の現ユルン中期中学校(Yurung Middle Secondary School)、1959年設立の現モンガル高等中学校(Monggar Higher Secondary School)等であると考えられる[63]。

おわりに

本稿では、約100年に亘るブータンの近代学校教育史の中で、特に明らかになっていない点が多い前半の50年史部分の近代教育事情に関して、【黎明期】(1910～1940年代)及び【草創期】(1940～1950年代)に分けて論じ、不明点を解明することを試みた。

第1節においては、黎明期に国内に存在したハの学校とブムタンの学校の諸相を検討し、どちらの学校の生徒も季節移動を繰り返していたこと、カリンポンへ留学した「46人」の少年とハの学校の第1期生である「46人」の少年は同一人物であること等を明らかにした。またカリンポンにおける調査をもとに、彼らの同地での留学先は、歴史教科書にも記され一般的となっているドクター・グラハムズ・ホームではなく、SUMIである可能性が高いことを指摘した。

第2節においては、草創期に設立され出したネパール人移住者の学校と一般に開かれたブータン人の学校それぞれの代表例を挙げるとともに、第3代国王や初代首相といった為政者が1950年代に近代教育をどう理解しそれをどう整備しようとしたかを論じた。結果、彼らは社会経済開発を行うにあたって近代教育の普及を最重要視していたこと、外国人への依存を避けブータン人の学校では教員を自国内で賄おうとしたこと、早い段階で「まず自国の若者を教育し、それから近代化を」という政策の転換を余儀なくされたこと等が明らかになった。また、提示される数値が統一されていない第1次5ヵ年計画開始時の学校数に関して、手持ちの資料をもとに考察し各数値の意味するものを推察した。

一方で、ハの学校やブムタンの学校が設立された正確な年月等を特定させることはかなわず、その解明は課題として残されている。また、1930～1940年代の各学校の諸事象はシッキム政務官

による年次報告書のみからは明らかにすることは難しく、一層の研究が必要である。さらに、全体を通して当時の学校の教育方法・内容はほとんど解明されておらず、これらを明らかにすることも今後の研究課題としたい。

付記

本稿は、第33回雲南懇話会（2015年6月27日（土）、於：JICA研究所国際会議場）にて、「ブータンにおける学校教育の歴史的変遷―学校教育100年史―」と題して発表した内容の前半部分をまとめたものです。貴重な機会を与えてくださった前田栄三代表幹事をはじめ、関係の皆様に厚く御礼を申し上げます。

注

1）20世紀初頭まで、ブータンにおける唯一の組織的な教育機関は僧院であり、そこではチベット仏教の僧侶となるために必要な素養の教育が施されていた。僧院教育は現在も僧侶の養成機関として機能しているが、本論文では、同国において当初は少数精鋭のエリート教育を、後には国民的教育制度の成立と普及を目指した教育を「近代教育」と総称することとする。

2）スコットランド国教会の神父であるGrahamによって、1900年にカリンポンに設立された学校。恵まれない孤児及び英印混血児のための学校として開校した。

3）Curriculum and Professional Support Division (CAPSD), Department of School Education, Ministry of Education (MoE) (2005) *History: A Supplementary Text for Class XII*, Paro: MoE, p.60.

4）*Ibid.*

5）Mackey, William (2002) "How it all Began", in Centre for Educational Research and Development (CERD), Department of Education, National Institute of Education (NIE), *The Call: Stories of Yesteryears*, Paro: CERD, p.6

6）CAPSD, Department of School Education, MoE (2005) *op. cit.*

7）学校数は小学校（Primary School）、前期中学校（Lower Secondary School）、中期中学校（Middle Secondary School）、高等中学校（Higher Secondary School）の総計。在学者数は左記学校の在学者数に、分校という位置づけである拡大教室（Extended Classroom）の在学者数を加えたもの。Policy and Planning Division (PPD), MoE (2015) *Annual Education Statistics, 2015*, Thimphu: MoE, pp.1-2.

8）Tandin Wangmo & Kinga Choden (2011) "The Education System in Bhutan from 747 AD to the First Decade of the Twenty-First Century", in Yong Zhao (ed.), *Handbook of Asian Education: A Cultural Perspective*, New York: Routledge, pp.442-451.

9）Jagar Dorji (2003) *Quality of Education in Bhutan: A Personal Perspective on the Development and Changes in Bhutanese Education System since 1961*, Thimphu: KMT Publisher. Jagar Dorji (2005) *Quality of Education in Bhutan: The Story of Growth and Change in the Bhutanese Education System*, Thimphu: KMT Publisher. Singye Namgyel (2011) *Quality of Education in Bhutan: Historical and Theoretical Understanding Matters*, Thimphu: DSB Publication. 杉本均（2000）「ブータン王国における公教育と青年の意識―伝統と近代―」（京都大学ヒマラヤ研究会『ヒマラヤ学誌』第7号）11-31頁。

10）杉本（2000）前掲論文、13頁。

11）Collister, Peter (1987) *Bhutan and the British*, London: Serinda Publications, p.174.

12）Lam Pema Tshewang / Jagar Dorji (trans.) (出版年不詳) *History of Bhutan: The Luminous Mirror to the Land of the Dragon*, Thimphu: KMT Printing Press, p.325.

13）Karma Phuntsho (2013) *The History of Bhutan*, Noida: Random House Publishers India Private Limited, p.529.

14）CERD, Paro College of Education (PCE), Royal University of Bhutan (RUB) (2007) *Sherig Saga: Profiles of Our Seats of Learning*, Paro: CERD, p.133.

15）Singh, Nagendra (1985) *Bhutan: A Kingdom in the Himalayas, A Study of the Land, its People, and their Government (Third Revised Edition)*, New Delhi: S. Chand & Company, p.185.

16）C. T. Dorji (1995) *A Political and Religious History of Bhutan (1651-1906)*, Delhi: Prominent Publishers, p.228. C. T. Dorji (1996) *A Brief History of Bhutan*, Delhi: Prominent Publishers, p.50. C. T. Dorji (1997) *Blue Annals of Bhutan*, Delhi: Vikas Publishing House, p.106.

17）PPD, MoE (2012) *Annual Education Statistics, 2012*, Thimphu: MoE, pp.8-9. Tandin Wangmo & Kinga Choden (2011) *op. cit*., p.445.

18）「1950 年代末」の数値。Priesner, Stefan (1999) "Gross National Happiness: Bhutan's Vision of Development and its Challenges", in Sonam Kinga et al. (eds.) *Gross National Happiness: Discussion Papers*, Thimphu: Centre for Bhutan Studies (CBS), p.25.

19）59 校のうち、29 校は公立学校、30 校は私立学校であるとされている。Savada, Andrea Maltes (ed.) (1991) *Area Handbook Series Nepal and Bhutan: Country Studies (Third Edition)*, Washington D. C.: Federal Research Division, Library of Congress, p.284. 第 2 次 5 ヵ年計画（Second Five Year Plan）や Coelho の著作内にも同様の記述がある。Royal Government of Bhutan (RGoB) (1966) *Second Five Year Plan (1966-1971)*, Thimphu: RGoB. Coelho, Vincent Herbert (1971) *Sikkim and Bhutan*, New Delhi: Indian Council for Cultural Relations, Vikas Publications.

20）Singh (1985) *op. cit.*, p.187.

21）「1959 年現在」の数値。72 校すべてが公立学校であるとされている。外務省アジア局南西アジア課（1961）『ブータン事情』外務省、7 頁。

22）Mackey は、彼がブータンに入国した 1963 年 10 月の時点で小学校が約 20 校あったと記している。Mackey (2002) *op. cit.*

23）大英図書館（The British Library）所蔵資料。L/P&S/12/2223, File2, Annual reports 1911-12 and 1946-47, Jun 1912-Jun 1947.

24）平山雄大（2013）「1940 ～ 1950 年代のブータンにおける近代学校の類型とその対照的特徴」（日本国際教育学会『国際教育』第 19 号）42-59 頁。

25）1952 年に父である Sonam Tobgye Dorji の後を継ぎ侍従長（gongzim）となり、その後 1958 年に初代首相（lyonchhen）となった。

26）Bell, C. A. (1915) "Annual Report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1914-15", No.65-E. C., dated Gangtok, the 12th (received the 17th) May 1915, p.2.

27）Bell, C. A. (1916) "Annual Report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1915-16", No.104-E. C., dated Gangtok, the 18th (received the 22nd) May 1916, p.2.

28）初代国王が英領インド総督にあてた手紙。Ugyen Wangchuck (1921), dated Pumthang, Bhutan, the 5th September 1921, p.2.

29）中尾佐助（1959）『秘境ブータン』毎日出版社、43 頁。

30）Earl of Ronaldshay (1987) *Lands of the Thunderbolt: Sikhim, Chumbi and Bhutan*, Berkeley: Snow Lion Graphics, p.245.

31）例えば上記の仏塔には、「ブータン教育元年にあたる 1914 年にハと SUMI で学んだ学生の番号と名簿」と彫られている。

32）Dr. Graham's Homes (1961) *The Kalimpong Homes' Magazine*, Vol.4 No.1, Kalimpong: Dr. Graham's Homes, p.8.

33）記録内の Ugyen Dorji の表記は Ugan Dorjee となっている。Scottish Universities' Mission Institution (SUMI) (1986) *Sumite Century Sourvenir: The Editorial Board 1986*, Kalimpong: SUMI.

34）左端に写っているのは Sonam Tobgye Dorji である。

35）Weir, J. L. R. (1931) "REPORT ON THE VISIT TO BHUTAN OF THE POLITICAL OFFICER IN SIKKIM AND THE PRESENTATION OF THE K.C.I.E. TO HIS HIGHNESS THE MAHARAJA OF BHUTAN", Letter from the Political Officer in Sikkim, No.16(1)-P./30., dated Gangtok, the 2nd April 1931, p.6.

36）ベイリーによる 1923 年 5 月 18 日付の年次報告書にて初めて同試験（1922 年）の受験者が確認され、1923 年には 4 人、1924 年には 8 人が受験しているが、この 1924 年の受験者 は、Tashi、Karchung、Phenchung、Do Thinle ら写真 3 に写っている者たちだと考え

られる。

37）Bailey, F. M. (1923) “Annual Report on Bhutan for the year 1922-23”, No.1092-G., dated Camp via Gangtok, the 18th May 1923, pp.1-2.

38）Bailey, F. M. (1926) “Annual report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1925-26”, No.290/P., dated Gangtok, the 17th May 1926, p.3, pp.4-5.

39）Bailey, F. M. (1927) “Annual report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1926-27”, No.?31-P., dated Gangtok, the 25th May 1927, pp.2-3.

40）Bailey, F. M. (1928) “Annual report on the relations between the British Government and Bhutan for the year 1927-28”, No.387/P., dated Gangtok, the 18th May 1928, p.2.

41）Morris (1935) “A Journey in Bhutan”, *The Geographical Journal*, Vol.86 No.3, p.212. 日本語訳は C. J. Morris 著／古川彰、月原敏博訳（1996）「ブータンの旅（翻訳）」（京都大学ヒマラヤ研究会『ヒマラヤ学誌』第 6 号）120 頁を参照した。

42）*Ibid*.

43）Williamson, F. (1933) “Report on a visit to Bhutan in 1933”, Letter from the Political Officer in Sikkim, No.6(8)-P./33., dated Gangtok, the 29th November 1933, p.2.

44）SUMI (1986) *op. cit.*

45）CERD, PCE, RUB (2007) *op. cit.,* pp.357-358.

46）*Ibid.,* p.363.

47）*Ibid.,* p.311.

48）ただし、一部の学校ではヒンディー語に加えゾンカ、チョケ、英語も教授言語として使用されていた。

49）*Ibid.,* pp.454-455, p.458.

50）*Ibid.,* pp.253-254.

51）同校の校舎は現存しており、ブータン陸軍の独身寮として転用されている。

52）Stewart, Natalie H. & Todd, Susie & Stewart, Frances Todd / The National Steering Committee for the Coronation, Ministry of Home and Culture (eds.) (2008) *Class of ’56*, Thimphu: Voluntary Artists’ Studio, Thimphu (VAST), p.3.

53）CERD, PCE, RUB (2007) *op. cit.,* p.114.

54）Rose, Leo E. (1977) *The Politics of Bhutan*. London: Cornell University Press, pp.131-132.

55）Kuensel (1971/11/14) “The Constitution of the National Assembly: Rules and Regulations for Assembly Meetings”. 日本語訳は浦野起央、西修編（1984）「19 ブータン王国」（浦野起央、西修編『資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史　第 6 巻　憲法資料アジアⅡ』パピルス出版）1137 頁による。

56）The New York Times (1956/5/10) “Change is Coming, Bhutanese Says: But the Wheel-Less State in the Himalayas Fears Rise of Modernization”.

57）Rose (1977) *op. cit.,* p.133.

58）Mangeot, Sylvain (1974) *The Adventures of a Manchurian: The Story of Lobsang Thondup*, London: Collins, p.223.

59）National Assembly Secretariat, RGoB (1999) *Volume 1: Proceedings and Resolutions of the National Assembly from 1st to 30th Sessions*, Thimphu: RGoB, p.27.

60）注 19 を参照。

61）Planning Commission, RGoB (1991) *Seventh Five Year Plan (1992-1997) Vol 1. Main Plan Document*, Thimphu: RGoB, p.72 等。

62）Policy and Planning Division, MoE (2005) *General Statistics 2005*, Thimphu: MoE, p.2、National Statistical Bureau, RGoB (2005) *Statistical Yearbook of Bhutan 2005*, Thimphu: RGoB, p.30 等。

63）各学校の詳細に関しては、平山（2013）前掲論文、53 頁を参照。

Summary

The Clarification of the Situation of Early Modern Education in Bhutan: 50 Years' History of Modern Education

Takehiro Hirayama

Institute for Advanced Studies in Education, Waseda University

This study aims to clarify the situation of early modern education in the Kingdom of Bhutan during the 1910-1950s by analysing reliable documents like annual reports on the relations between the British Government and Bhutan written by successive political officers in Sikkim.

The origins of modern education in Bhutan can be traced back approximately 100 years. According to a history textbook there, 1914 saw the inception of modern education when 46 boys travelled to study at Dr. Graham's Homes in Kalimpong, India. In the same year, Ugyen Dorji established Bhutan's first modern school in Haa District. Then in the following year, another school was established in Bumthang District for educating the Crown Prince and children of the people serving in the King's court. In the first half of this paper, the author tried to examine the various aspects of these schools and proposed some facts of them and their students.

Instead of the elite education institutions for the selected few, schools for the general public were established in Bhutan in the 1940-1950s. These schools can be classifying into 'private schools for Nepali immigrants' which were privately established in response to the strong demands of local residents in Southern area and 'public schools for Bhutanese' which were established under the initiative of local government officials. In the second half of this paper, it mentioned representative examples of these contrasting schools and took up educational development plan and ambition by policy makers such as the Third King Ugyen Dorji Wangchuck and the first Prime Minister Jigme Palden Dorji.